

「希望」を繋ぐウガンダと日本の子どもたち

風巻 浩

神奈川県立麻生高等学校

◆担当教科：社会科

◆実践教科：政治・経済

◆時間数：16時間

◆対象学年：高校3年生

◆対象人数：6名(自由選択)

カリキュラム

<実践の目的>

「風巻先生一気をつけて無事に行ってらっしゃいませー！ウガンダの子たちにもハナの子たちに
して下さったように色々な希望を沢山あげて来て下さい！」

僕は韓国と日本の高校生そして朝鮮学校に通う高校生を繋ぐ活動をおこなっている。ハナとはそ
ブチョン
の交流「川崎・富川高校生フォーラム・ハナ」のことだ。このメールの主のN君は日本語教師とし
て日韓の架け橋になろうとしている。彼の言葉はウガンダ滞在中、いつも僕の心のなかに響いてい
た。ウガンダの子どもたちにとっての「希望」とは、そして日本の子どもたちにとっての「希望」
とは何なのだろうか。

僕にとってのアフリカ像のはじまりはロックバンドにあけくれていた高校時代。ブルースやジャ
ズのルーツはアフリカにあると知った。教員なりたての80年代初頭、世界史の深さを知ったころ、
ちょうど起こっていたのが、アフリカのイメージを飢えと貧困とに一面化する飢餓「キャンペーン」
だった。「アフリカに生まれて悪いかよ！」楠原彰さん（あえて、こう呼ばせていただく）の代弁が
心に突き刺さった。（「アフリカからみた日本の課題」『歴史地理教育382号』1985）反アパルトヘイ
ト運動に悩む若き日の楠原さんが、世界史学の巨人、故上原専禄に「南アフリカのアフリカ人の自
由と解放は、日本に住む私たちの自由と解放の問題です」と諭されたように、僕はベトナム・ラオ
ス・カンボジア難民の小中学生や在日コリアンの教え子との関わりを80年代末から持つようになって
いた。

アフリカをどう学校に入れ込めばいいのか。「幼稚園の時、アフリカの子どもにおもちゃを寄付し
たことがあったので、（アフリカは）貧しくて子どもも十分に遊べない国というイメージをもってい
た」（Hさんが書いた今回の授業の感想から）というようなイメージが、生徒の一般的なものだった。

「ふーん、そうなの」で終わってしまう知識でもなく、「悲惨さ」の絶対値を強調するのでもなく、
自分の立ち位置への省察なき「チャリティー」でもない、そんな授業は可能なのか。ウガンダと日
本の子どもを同時代に生きる等身大の存在として、日韓在日の高校生のように何らかの形で繋いで
いこうと考えた。

2008年の「9条世界会議」、会場外でのティーチインでは、ハーグ平和アピール代表のコーラ・
ワイスさん（米）が「9条を世界に広める大使になってください」と語りかけていた。また、同年
5月末の「報道ステーション」で放映された「日本の憲法9条がアフリカを変える」という特集も
興味深かった。アフリカと日本の子どもたちを憲法9条で繋げる、そんなアイデアが浮かんできた。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
①：日本国憲法の学習(@日本)	憲法についての座学 ワークショップ「大日本帝国憲法 と日本国憲法の違い」	・教科書、資料集

②：ウガンダ、アフリカについての基本学習 (@日本)	関連ビデオをみせ、ウガンダやアフリカの現状についての基礎知識を獲得させる。	・ビデオ「日本の憲法9条がアフリカを変える」(2008年、報道ステーション放映)、「1口25ドルでウガンダを救え」を見せる(2008年、BS1) ・MAC、外部スピーカー
③：ビデオクリップ制作 (@日本)	・日本国憲法を外国の人に説明するためには、どのようなことを中心にすればいいかを考え、その後、それを英文にし、ビデオクリップにする。	・デジタルビデオカメラ ・MAC
④：ワグンブリジ中等学校での授業 (@ウガンダ)	・日本国憲法について説明。その後、麻生高校生が制作したビデオクリップを見せ、「平和」と「希望」をテーマにメッセージを書かせ、発表してもらう。	・MAC、外部スピーカー ・メッセージを書く紙
⑤：マーガレットさん(ウガンダ地雷生存者協会代表)との出会い (@ウガンダ)	・麻生高校生が制作したビデオクリップを見せコメントをもらう。	・MAC、外部スピーカー
⑥：帰国報告 (@日本)	・自分たちの作成したビデオクリップに見入るウガンダの子どもたちやマーガレットさんのコメントの映像を見る。 ・ウガンダの民族衣装を着てみる。 ・おみやげタイム	・現地で取った授業のビデオ ・MAC、外部スピーカー
⑦：アフリカの高校生にとっての「平和」と「希望」とは? (@日本)	・ワグンブリジ中等学校の生徒の書いたコメント(英文)を読み、読んだあとに感想を書く。	ワグンブリジ中等学校の生徒が書いたコメントを活字化し、翻訳をしたもの。
⑧：地雷廃絶日本キャンペーンへの参加 (@日本・ウガンダ)	・「地雷廃絶日本キャンペーン」の資料を使い、対人地雷について学習 ・メッセージを書く。	・「地雷廃絶日本キャンペーン」からお借りした地雷の模型、パネル、メッセージ用紙

授業の詳細

(今回の実践は、日本、ウガンダを通じ、半年間に及ぶ統一された実践であるので、全体として報告をしたい。)

■事前授業の組み立て

ウガンダの子どもたちに憲法9条をどう伝えるか。高校生たちにビデオクリップを作らせることにした。まずは原稿作りだ。話し合いのなかで1：麻生高校の紹介、2：新憲法制定への歴史、3：憲法の内容、4：自衛隊の海外派遣などの憲法をめぐる問題点、5：平和憲法の良い点、6：日本

人が憲法をどう思っているのか、の6テーマとすることに決め、分担して英語の原稿を作成した。生徒の作った英文を英語科の教員に添削してもらい原稿を確定。次にプレゼンテーションの撮影をする。AETの先生に発音をチェックしてもらい、撮影をおこなった。「Don't have arms! Don't fight wars! Let's keep peace!」と最後に全員で訴えるビデオクリップが完成した。「(ビデオを制作して)自分たちのことばが、アフリカのウガンダの子どもたちの元まで届いたと思うだけで、ドキドキワクワクしました。」(Mさん)ここまでが1学期。【資料①】

■ウガンダでの授業実践までの不安

現地での実践には課題が多かった。授業はワグンブリジ中等学校という学校で中学3年生相当の生徒たちにおこなうことになった。授業の組み立て、方法については、なかなかイメージを作ることができなかった。初めてのアフリカで、どんな授業ができるのか、まったく見当がつかなかった。事前研修での青年海外協力隊OBの話では、ウガンダの授業は生徒に考えさせるような授業ではなく、教師の一方的な授業になっているということだった。ウガンダの子どもたちの意見を聞けるのかどうか不安材料となった。協力隊OBからは、戦争というウガンダではまだ生々しい材料を授業内容とするのは良くないとの意見も出た。不安のなかで準備することになった。

■教室に必要なものは「知らない」ということ

7月27日、ウガンダに到着。1時間弱の実践時間のなか、どのような問いを投げかけるか、どのような授業構成にするかは、現地についてからも迷っていた。幸いにも、他の先生の実践が先にあった。「この教室に必要なものはなんですか?」という問いを受けた中等学校の女子生徒が「知らないということ」と答えた。何という哲学的な答え!こんなにも詩的な発言ができる子どもたちだということが分かった。自分の授業でも、問いかけにはきっと答えてくれるだろうという見通しがあった。9条そのものへの問いではなく、「平和」と「希望」をテーマとすることにした。最初に述べたN君の「ウガンダの子たちにも希望を沢山あげて来て下さい」という言葉が、心に残っていた。

■ワグンブリジ中等学校での授業

授業当日となった。最初に日本国憲法についてウガンダの歴史と関連づけながら英語で説明した。「ウガンダと同じように日本も、140年ほど前に内戦があり、その後、アジアを侵略し、原爆が落とされたあと、第2次世界大戦に敗北した。この時、日本は2度と周りの国を侵略しない「平和」な国になろうという「希望」を持ち、平和憲法を作った。例えば、アフリカに日本は武器を輸出していないが、それはこの憲法があるからだ」そんな話をした。「平和」憲法は、そのころの日本の「希望」だったはずだ。

その後、麻生高校の生徒が作ったビデオクリップを見せて、「平和な世界を作り、希望を実現するにはどうしたらいいのか」というメッセージを書いてもらった。突然の課題に生徒たちはよく応えてくれた。

■ウガンダの子どもたちにとっての平和と希望とは

内戦が続いていた北部から来たマトゥアさん(男子)は最後に発表をしてくれた。「平和な世界を実現するのに大事なことは、まず神を畏れること。そして、国際的な友好関係を構築すること。憲法を制定し、国内の政治的安定を造り上げること。国際援助団体の助力。そして、原爆のような危険な武器を作らないこと。また、私たちの希望とは、内戦が起らないこと、政治闘争が起らないこと。そして言論の自由です。」

カンガベさん(男子)は世界の人々は平等な「民衆」なのだと書いてくれた。「アフリカ人も、それ以外の人々も、世界のなかで平等であるべきです。貧乏な人々も豊かな人々と同様に、軽視されるべきではありません。「私たち(We)」は「民衆(people)」なのです。みんな空気を吸って生きて

いるじゃないですか。二酸化炭素を吸って生きている人なんていませんよ。(後略)」

カンガベさんだけでなく、多くのウガンダの子どもたちは、We を大きな枠組みで捉え、「地球に生きる私たち」という視点で使っていることが多かった。「うちら」というまさしく内向きのWeを使うことが多い日本の子どもたちとの差は大きい。ウガンダの子どもたちの方が、よっぽど「地球市民」意識を持っている。(ワグンブリジ中等学校の生徒のコメントとその活字化したもの、翻訳は、【資料2】を参考にされたい。)

またウガンダの子どもたちは、「アフリカ分割」や「アパルトヘイト」を批判し、イラク戦争に言及する鋭い現代認識を持っていた。平和と希望の実現に重要なこととして、「神」をあげ、「学習することの重要性」にふれる生徒が多いことも日本の高校生たちを驚かせた。

ビデオは、ウガンダで地雷被害者の精神的ケアをおこなっている被害者女性、マーガレット・アレク・オレクさん(ウガンダ地雷生存者協会代表)にも見てもらった。「若い世代が平和を訴えていくことが、戦争のない未来につながる」という言葉は、生徒たちを勇気づけることとなった。(マーガレットさんの感想は、【資料3】を参照されたい。)

■直接会ったのではないけれど一緒に考えられた

帰国後の授業。最初に現地の写真やビデオを見せる。自分たちのプレゼンビデオをウガンダの子どもたちが見入っている。「私たちのビデオを見て、たくさんの感想を持ってくれたこと、ビデオレターを真剣に見てくれてすごうれしかった。直接会ったわけじゃないけど、一緒に”平和”について考えることができ、いろいろな平和のあり方を考えさせられた。」(Mさん) 次に、ウガンダの生徒たちの意見を活字化したものを紹介。分担して翻訳をして感想を書いた。

■平和を作るのは私たち

生徒たちの感想を紹介したい。

「(生徒たちの意見を読んで) すごく立派な意見だと思いました。内戦も起こり、地雷など恐ろしいものを近くにしながらも、世界平和のためには「他国を愛すること」が大事と書かれた文は、とても印象に残っています。彼らはウガンダ国内だけでなく世界単位で平和を望み、希望を持っているんだと思いました。勉強熱心で平和を愛する気持ちに驚きました。」(Hさん)

「憲法9条が、世界でどのような形で受け入れられているのかが、今回の授業で知ることができました。自分たちで憲法9条についての英文を作ったことで、今まで知らなかったことや、伝えることの大変さを学べたと思います。私たちの発表の感想文を見て、すごく圧倒されました。ワグンブリジ中等学校のみなさんは、平和についてしっかりと考えているのだろうと感じました。(中略) マーガレットさんのことばを読んで思ったことは、私たち若い世代がこれからの平和を作らなければいけないということです。憲法の内容を知っているだけで、何も行動をしないのは、知らないこと以下だと思います。(中略) 知っている人がそれを伝えようとしないう、自分が働こうとしないうのはおかしいと考えました。だから、憲法について学び、他国の状況を知ったら、多くの人に少しでも9条について理解してほしいです。そのために自分ができることはやっていきたいと思います」(Tさん)

「私たちよりも年下の子どもたちが、戦争のことや平和について、とても身近に考えているなと感じました。私よりも、戦争の知識があつて、平和な世界にしたいという気持ちが強いんじゃないかと思います。

ウガンダの子たちの感想文には、“平和の作り方” がとても具体的に書いている人が多く、自分にはまったく思いつかない事がいろいろ書いてあったので、おどろきました。

私たちは、日本で安全に暮らして、私は戦争なんて無論経験したことがないけど、ウガンダの人たちは戦争をすごく身近に経験してきているので、書いてくれた意見は今後、必ず叶わなければいけないことだと思いました。」(Mさん、一部)

■ウガンダと日本を繋ぐ平和のアクションを！

9 月末以降は、電話で教室を繋ぎ話しあいながら共同作業をして発信していこうと考えた。具体的には、マーガレットさんも関わっている対人地雷廃絶のアクションで、締結を促す蝶々の形の手紙を非締結国へ送るという「ちょうちょキャンペーン」(地雷廃絶日本キャンペーン)への参加だ。日本政府も、ウガンダ政府も、この条約は批准している。か弱い蝶のはばたきも大きな台風に影響する、という複雑系理論からとった名前のキャンペーン。蝶々型のメッセージカードに、麻生高校の生徒とワグンブリジ中等学校の生徒が地雷廃絶への簡単なメッセージを書く。2009 年年末までに、地雷廃絶日本キャンペーンに送付する予定だ。対人地雷に継いで、クラスター爆弾の廃絶への第一歩もはじまった。ウガンダの子どもたちと日本の子どもたちを繋げ、武器のない平和な世界づくりへの一歩にしていきたい。それが私たちの希望なのだから。

成果と課題

「アフリカと日本の子どもたちを憲法9条で繋げる」という当初の目的は達成されたと考える。ウガンダの子どもたちの「地球市民意識」は、日本の子どもたちの上をいっているのではないか。それを実感できたことも成果であった。「うちら」という言葉が象徴するように、日本の子どもたちの意識が、あまりにも「内向き」になってしまっていないか、その恐れが確信に変わってしまった。

「アフリカからみた日本の課題-アフリカの飢餓と日本人学校」という文章が『歴史地理教育 382 号』に掲載されてから、もう24年たってしまった。楠原彰のこの言葉(元は講演)が語られた4半世紀、僕らはどれだけ「発展」をすることができたのだろう。少し引用したい。

「(1. なぜ、世界がみえないか) 僕自身も、僕の身の回りにいる若いひとたちも、最近、この十年ぐらい、世界が見えなくなってしまっている。世界が見えない、他者がみえない、外界が見えない。

世界や他者が見えなくなってきたというのは、世界が複雑になってきてきたという面と、もう一つは、自分が抑圧されている状況になかなか気づかなくなってしまったというような問題がある。最近では、学校教育も含めて、さまざまなシステムやイデオロギーの“みえない暴力”の壁にはばまれて、世界が見えなくなってしまっている。自分自身がどういう状況におかれているか、自分がどういう人間になりたいのか、自分はほんとうにもっと豊かな人間になりたいのか、なりたくないのか、という人間の基本的要求のようなものが摩滅してしまっている、そんなことをすごく感じるわけです。自分の要求が、あるいは自分のおかれている抑圧あるいは非抑圧の状況が感じられなくなり、見えなくなるにつれて、世界が、他者が、抽象化されてしまい、自分と無関係なある一つの対象、物体にしか見えなくなる。これが最近の“アフリカ飢餓キャンペーン”だろうと思います。アフリカの飢餓という現実が、自分自身がおかれている状況と無関係にだけ伝えられてくる。だから、せいぜい起こってくるのは同情でしかないわけです。(後略)」

JICAのこのプログラムだけではないが、世界と関わる授業を作り出す時忘れてはいけないことは、世界、他者を自分とは無関係な「対象」としか見ない、自分自身も含めて、そのような日常をいかに壊すことができるかということ、常に問い続けることではないだろうか。そのためには、近年いっそう強くなってきた学校現場や社会における「みえない暴力」に、どう立ち向かっていくかが問われている。

佐藤学は「勉強」と「学び」を区別し、前者から後者への転換を日本の教育変革の課題とする。佐藤によれば、「勉強」という中国語は元々「無理なことをすること」を意味した。しかし、いつしか「座学(無媒介性)」により「一人で(個人主義的)」「知識、技能をひたすら獲得し蓄積する(フレイレの言う「銀行型教育」)」という「勉強」という学校文化、教育のスタイルが、日本の(そして、中国、韓国なども)一般的な学習スタイル、学校文化になってきてしまった。佐藤はこのように「勉強」に対峙させて、「モノと対話し他者と対話する活動」「他者との交わりを通じて遂行され、

個と個の差異のすり合わせを通して達成されるいとなみ」「(知識を) 教室の中で仲間たちと問題を表象し解決する過程において、表現し共有するものとして活用する」という「活動的で協同的で反省的」な「学び」の重要性を強調する。

アフリカの子どもたちは、「学び」の力を確実に持っていた。ここからは仮説になってしまうが、子どもを取り巻く社会的学びのプログラムがまだ、生きているのであろう。このような「学び」を日本的な「勉強」で壊していくようなことを、日本の「教育援助」でおこなっていないか。少なくともこそその力に気づいているのかいないのか、教育関係者は常に自省しなくてはならない。

授業で使用した資料

【資料①】麻生高校生が考えた日本国憲法に関するプレゼンテーション原稿

1. INTRODUCTIONS

Hello. We are Asao high school students.

We are 17 and 18 years old.

We are studying about the Japanese Constitution and Article 9 in our politics and economy class. So, we will tell you about it.

But, before we tell you about the Constitution, we would like to tell you about our school life first.

First of all, there are a lot of woods around our school so we have a nice environment.

Secondly, our school buildings are clean, and are 20 minutes from the nearest train station.

Lastly, the students are sincere and cheerful.

There are lots of clubs, for example, soccer, baseball, dance, and brass band. We enjoy school life everyday.

2. HISTORY

Now, we will talk about the history of our Constitutions. Under the old Japanese Empire Constitution, Japan invaded East Asia. The current Constitution was made under reflection of that period.

A person called MacArthur, the commander in chief of the occupation army, helped to make our new Constitution. Japanese people considered plans of the new Constitution positively. MacArthur referred to that plan. In 1947, the Japanese Constitution began to work.

1 はじめに

こんにちは。私たちは麻生高校生です。私たちは18才です。

私たちは政治・経済の授業で日本国憲法と憲法9条について学習しましたので、これについてみなさんにお伝えしたいと思います。

しかしその前に、私たちの高校についてまず、お話したいと思います。

第1に、私たちの学校は緑が多く環境が良いです。第2に、校舎が綺麗で、駅から20分のところにあります。最後に、生徒は真面目で明るいです。部活動も沢山あります。例えば、サッカー、野球、ダンス、そして、吹奏楽。毎日、楽しく生活しています。

2 歴史

これから、日本の憲法の歴史についてお話します。日本は古い大日本帝国憲法のもとに東アジアの国々を侵略し、日本国憲法は、その反省のもとに作ることになりました。

GHQ 最高司令官のマッカーサーが憲法作成を助けました。日本国民も積極的に憲法案を考えました。GHQは日本国民の案を参考にしました。こうして、1947年、新しい日本国憲法が成立しました。

3. CONTENTS

We'd like to briefly explain the content of Article 9.

We don't have arms. We don't fight wars to settle international disputes. According to these things, we hope to establish an international peace. That is the spirit of Article 9.

4. ISSUE

We'd like to describe an issue with Article 9. Japan has a Self-Defense-Force though we have Article 9.

The Self-Defense-Force is in Iraq now. However, it is not directly involved in military activities, but activities for water supply and transportations.

It is a big issue whether the activities of

The Self-Defense-Force is unconstitutional or not.

5. GOOD POINTS

Next, We'd like to talk about some of the good points. We don't fight wars and have lived at ease for over 50 years. We can maintain freedom and peace. Though we don't think it over often, if we lose it, we would be in trouble. We hope that Article 9 will be a model for people all over the world.

6. HOW WE THINK

Finally, we will speak about how the Japanese think of Article 9.

We are proud of the Japanese Constitution and Article 9. Though there are movements to revise the Constitution, many people don't want to change Article 9.

Most Japanese are not interested in the Japanese Constitution, but we came to be interested in it after we studied about it in this class.

We hope everyone will be interest in it.

Don't have arms!

Don't fight wars!

Let's keep peace!

3: 内容

憲法第9条について簡単に説明します。

武器を持たない。戦争によって国家間の問題を解決しようとしな。これを基に、平和な国際関係を作ろうということが、憲法9条の精神です。

4: 問題点

憲法9条をめぐる問題点をあげます。憲法9条を持ちながら、日本は自衛隊を持っています。その自衛隊がイラクに派遣されています。しかし、直接の軍事行動はしてなく、給水と輸送をおこなっています。

このような活動を自衛隊がおこなっていることが違憲であるかないかが重要な問題になっています。

5: 良い点

次に、良い点をお話しします。50年以上も戦争を起こしてなく平和に暮らしています。国民の自由と平和が尊重されています。普段はあまり意識しないものですが、いざなくなると困るものでしょう。世界中の人々が9条をお手本にしてもらいたいです。

6: 思い

最後に、9条を人々がどう考えているかについてお話しします。

私たちは日本国憲法と9条を誇りに思っています。憲法を改正しようとする動きがありますが、多くの人々は9条を変えたいとは思っていません。

多くの日本人は改正についてあまり関心を持っていませんが、私たちはこの授業を受けることで、関心を持つようになりました。

すべての人々が憲法に関心を持ってほしいです。

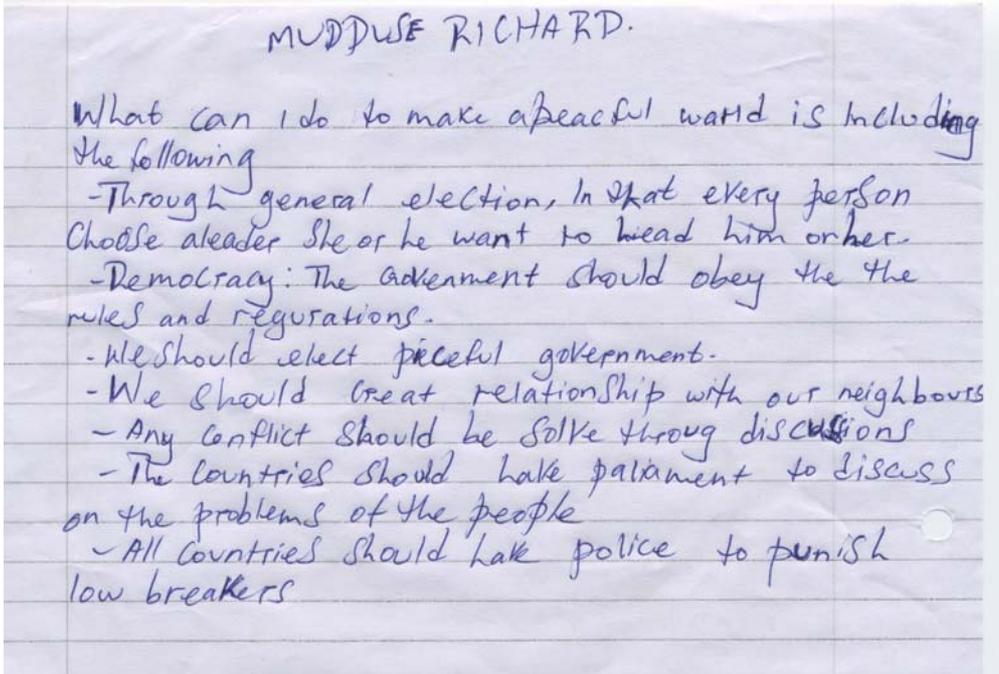
武器を捨てよう！

戦争を放棄しよう！

平和を守り続けよう！

【資料2】

マドゥース君の意見「民主主義とは、政府が法律に従うこと」



(訳) 平和な世界を作り出すためには、以下のことが必要です。

・普通選挙によって、全ての人が指導者を選挙すること。・「民主主義」：政府が規則や規制に従うべきこと。・平和な政府を選挙で作り出すべきこと。・隣人との友好関係を造りあげること。・どんな対立する問題でも、それを議論によって解決するべきこと。・人々が持つ問題を議論するための議会を持つべきこと。・法律違反をする人々を罰する警察機関を持つべきこと。

【資料3】 マーガレットさんのインタビュー（英語を聞き取り、翻訳したもの）

Very impress the younger generation know about their constitution, in our days actually, mean myself, be up to now, I don't know what my constitution talks about. So it's very impressible to know that the younger generation are taught about their constitution and they know what rights are, and they are the generation that advocating for peace. So if the younger generation are advocating for peace then it means, if they are giving that chance will have world without wars. Because it starts from within us, the many conflicts, that's all of the world. It starts from within us. So if we give our younger generation that chance to move ahead with what they are advocating, then we can be sure having future generation without force.

若い世代が自分達の憲法について知っていることに感銘を受けました。私たちの場合、実際、私について言えば、この年になっても自分の国の憲法が何を言っているのか知りません。それで、若い世代が自分達の憲法について教えられ、自分達の権利について知り、平和を主張していく世代である、ということがよくわかりました。もし、若い世代が平和を訴えていくなら、それは戦争のない世界をもつ機会を彼らが与える（造り出す？）こととなります。なぜなら、世界中の多くの紛争は私たちの中から始まるからです。それは私たちの中から始まります。ですから、もし私たちが、若い世代が主張していることをより進める機会を彼らに与えるなら、武力を持たない未来の世代が育つことを私たちは確信できます。